RSK山陽放送ラジオ　朝耳らじお5・5
「永瀬清子の光を受けて」vol. 4　二〇二一年六月二十一日

燃える故郷

小林章子（RSKアナウンサー）
伊藤正弘（RSKアナウンサー）
白根直子（赤磐市教育委員会熊山分室学芸員）

小林　この時間は、岡山出身の詩人、永瀬清子さんの詩や生き方、その魅力を永瀬さんのふるさと、赤磐市で研究を続けていらっしゃる赤磐市教育委員会熊山分室の学芸員、白根直子さんにご紹介いただきます。白根さん、こんにちは。

白根　こんにちは。

小林　六月になりますと、今から七十六年前の六月二十九日、岡山空襲のことを思います。私は、戦争を知らない世代なんですが、取材を通して、岡山空襲を実際に経験された方々にお話をうかがう機会があって、当時の悲惨な様子を想像し、平和の尊さを感じました。そのことを伊藤さんのような若い世代の方たちにも伝えていきたいと思います。永瀬清子さんも、戦争を経験され、作品を通して次の世代へ伝えてゆくということを大切にお考えだったようですね。

白根　永瀬さんは、ご自身の戦争体験を詩や随筆などに綴り、講演会で語るだけではなく、岡山の女性たちによる証言集も出版しています。永瀬さんは、尊敬する宮沢賢治の「ヨクミキキシワカリソシテワスレズ」を生涯にわたり心がけていましたが、戦争体験についても記憶し記録していた方です。

小林　さて、今日は永瀬清子さんのどんな詩をご紹介いただけますか。

白根　今日は、永瀬さんが初めて作詞をした合唱組曲「燃える故郷」を紹介します。永瀬さんは、六月二十九日の岡山空襲を、歌でも記録しています。

小林　その合唱組曲「燃える故郷」は、七章で構成されています。今回は五章にあたる「やけこげの」を朗読します。

五章　やけこげの

焼けこげの木をあつめて
僕らはたてた　自分のうでで
ギースかごのような小さい家を
焼け土の上　はだしのくらし
雨つゆしのぎ　命をまもる
ロビンソンのような
そまつな家を

太郎も次郎も生きぬいてきた
はだかで育った戦後の子供
がらくたの中で

枝をのばした

そうだよ　みんな
飢えと苦しみこりごりだ
汗をながすも生きるため
力をあわせて生きようよ
戦争で二度と
死ぬ人のないように

（『合唱組曲「燃える故郷」』岡山音楽センター　一九八五年六月）

小林　伊藤さん、この詩からどんな印象を受けますか？

伊藤　あってはならない戦争を二度と起こさないようにという戒めと、これから手を取り合ってがんばっていこうよという前向きなメッセージを受け取りましたね。

小林　白根さん、いかがでしょうか。

白根　こんなふうに関心をいただけるということで、若い世代の方たちにも伝えていく方法としても大切なのではないかと思いました。

小林　そうですね。さて、詩の中に「ギースかごのような小さい家を」とありましたが、「ギースかご」とはどのようなものなんでしょうか？

白根　「ギース」は「キリギリス」で、それを入れている「虫かご」のことです。

小林　その「虫かご」にたとえられるぐらいの小さな家ということですね。焼け跡で必死に暮らしている様子が伝わってきますね。

白根　はい。この合唱組曲「燃える故郷」は、木下そんきさんが作曲し、岡山合唱団により一九八一年六月に全曲が初演されて、今年で四十年という節目の年を迎えます。この曲は、岡山空襲のことをあらためて考えるきっかけにもなるのではないでしょうか。

小林　先月三十一日には、この番組で岡山合唱団の現在の活動をご紹介したところです。実は、この合唱組曲の音源が発見されまして、ご提供いただきました。こうした音源を大切に保管されていたことに敬意を表したいと思います。では、先ほど朗読しました「やけこげの」を合唱でお聴きください。

♪「五章　やけこげの」　岡山合唱団

小林　詩の朗読とは全く違う印象になりますね。創作の現場に立ち会った岡山合唱団の方から、詩と歌詞とは違うので、作曲者の木下そんきさんと永瀬さんが、ずいぶん話し合いをされたとお聞きしました。

白根　そうなんですね。私は、実際に歌を聴いたのは初めてです。詩として発表したものと合唱曲の歌詞は違うところがありまして、詩とは違った感じで心に刻まれるようです。

小林　そうですね。

白根　永瀬さんは合唱団の皆さんの努力に感動され、木下さんの音楽が自分の詩を深めてくださったという喜びを随筆に書いています。

小林　岡山空襲はずいぶん激しいものでしたが、永瀬さんのお住まいだった岡山市の家は焼け残りましたね。

白根　はい。ですから親類が全て集まり、立ち寄った文学仲間には、あるだけのお米を炊いておむすびをふるまい、助け合いながら終戦を迎えたそうです。

小林　ご自身も大変な思いをされたことで、一層戦争反対、そして平和への思いを強くされたのでしょうね。

白根　「やけこげの」には、苦しい生活の中でも希望をもって暮らす子どもの姿が描かれています。多くの方に読まれている「降りつむ」という詩にもつながるような希望や励ましがあり、苦しみから立ち上がろうとする姿が印象的です。

小林　「太郎も次郎も生きぬいてきた」という部分の曲調がとても力強くて、岡山合唱団の皆さんもしっかりと逞しい雰囲気で歌っていらっしゃいましたよね。「こどもたちも生きぬいてきた」というよりも、あえて「太郎次郎」とすることで、一人一人の命の逞しさ、尊さが際立ってくる気がしました。

白根　なるほど！ そうしたところに永瀬さんの子どもたち一人一人への思いが託され、木下そんきさんの作曲が詩を深め、岡山合唱団の皆さんの歌声がお二人の思いも伝えているんですね。永瀬さんの半生を綴った『すぎ去ればすべてなつかしい日々』（福武書店　一九九〇年六月）という随筆集には、岡山空襲などの戦争体験についても書かれていますので、ぜひ読んでいただきたいです。

小林　そうですね。ところで、白根さんの勤務なさっている「永瀬清子展示室」では、永瀬清子さんの生家の保存工事完了に合わせて、生家にちなんだ展示をなさっているそうですね。

白根　企画展というほどまとまってはいないんですけれども、これまで展示した中から、生家や熊山橋、吉井川などを書いた詩と資料を八月上旬くらいまでご覧いただけるようにしています。よろしければ生家とともにご覧ください。

小林　展示室は、今日は月曜日ですから定休日でお休みということで、明日からですね。ぜひお出かけになっていただきたいと思います。白根さん、今日もありがとうございました。

伊藤　ありがとうございました。

白根　ありがとうございました。

※記載されている情報は、二〇二一年六月二十一日現在のものです。

〈参考文献〉

永瀬清子「戦争の日々」『8・15前後―戦争と私たち』戦争を語り続く岡山婦人の会　一九七九年二月
永瀬清子「やけこげの」『8・15前後　戦争と私たち（第二集）』戦争を語りつぐ岡山婦人の会　一九八一年六月　※随筆「空襲中の生と死」、詩「ひもじさの声」も収録
永瀬清子「二つの仕事　平和についての努力」『赤旗』文化　一九八一年八月九日　八面
永瀬清子「『燃える故郷』発表フェスティバル」「女人随筆」第四十三号　一九八一年八月